「駆け寄ってくださる神」（ルカ１５：１１－２４）　2020.9.20

主の祈り⑤

先週からこの箇所をお話ししていますが、このたとえ話は、子どもたちのキャンプや特別な伝道集会などで昔からよく語られてきた箇所であります。「放蕩息子」という名前がこの話に付けられるとき、この物語の主人公はこの弟息子になります。話の中心も、この息子がどのようにして父親のもとへ帰って行ったのか、という点が中心になります。すなわち、「悔い改める」という一点が語られるメッセージの中心となります。そのメッセージの最後には、「さあ、あなたがたも罪を素直に認めて、悔い改めなさい」という勧めが語られることになります。私も中高生の頃、九州教区の夏のキャンプで、繰り返しそのようなメッセージを聞いてきました。そのようなメッセージは、私たちが救われるか否かの最大のカギは、私たちが罪を悔い改めるか否か、その一点にかかっている、ということになります。

しかし、この箇所で、主イエスは果たしてそのようなことを語ろうとしているのでしょうか。焦点となりますのは、この物語の主人公は誰か、という点であります。それを正しく理解するためには、この１１節からのたとえ話だけでなく、それよりも前に語られた２つのたとえ話を振り返る必要があります。主イエスはこのルカ１５章で、同じ一つのテーマで３つの譬えを重ねるようにして語っておられます。４節から７節には、迷子になった羊を捜し出す羊飼いのたとえ。８節から１０節には、失われた銀貨を捜し出す女性のたとえ。いずれも、迷子になった羊や失われた銀貨そのものに焦点を当てるのではなく、失われていたものを見つけ出して大喜びをする人の話を語っておられます。この１１節からのたとえ話も、主イエスの意図としては、「放蕩息子」がこの物語の主人公ではなく、その帰って来た息子を喜んで迎え入れる父親こそ本当の主人公であります。主イエスはこの三つの譬え話で、罪人を喜んで迎えてくださる父なる神を紹介しておられます。

そこで今朝は、２０節の「**哀れに思って走り寄り**」という聖句を中心に、父の姿を見つめたいと思います。キリスト教信仰にとって非常に重要なのは、私たちがどう生きるかという前に、私たちが信じる父なる神がどのようなお方であるのか、ということを正しく知る、という点であります。神がどのようなお方であるかが分かるとき、その恵みへの応答としての信仰の歩みが始まります。

前回もお話ししたように、この息子はまだ元気にしている父親から財産を譲り受け、それらをすべてお金に換えて、家を捨てて、遠い国へと旅立って行きました。そこで、放蕩の限りを尽くし、持っていた財産を全て使い果たしてしまいました。そのとき、運が悪く、ちょうどその地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べることさえ出来なくなってしまいました。

私たちの人生というものは、しばしばこのようなことが起こるものであります。これがもっと違うタイミングだったならば、なんとかなったのに、よりよってこんなときに、このようなことが起ころうとは、ということが起こる。しかし、視点を変え、別の角度から眺めてみますと、また違った事実が見えてまいります。悪いことが重なり、不運な

目に遭ったからこそ、もうどうしようもなくなって、それで彼は自分自身を見つめ直す機会が与えられました。私たち人間というものは、行き詰まらないと、本当に苦しい目に遭わないと、自分を見つめ直したり、神を求めたりしないようなところがあるのではないでしょうか。

生きるか死ぬかという状況に追い込まれたとき、１７節に「**そこで彼は本心に立ちかえって言った**」と書かれています。他の訳では、「**我に返って**」と訳されている－「本当の自分に戻った」ということです。夢からハッと覚めた時のように、自分が間違っていたことに気づいた。何に気づいたのか、あの父の家から離れてしまったことが全ての原因であった、と気づいた。父の家では食べ物がたくさんあり、召使いでさえ飢えることなく十分に食べている。それなのに自分はこんなところで飢えて死のうとしている。

そこで彼は、ついに父の家に帰っていく決心をいたします。１８節、「**立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください**」（１８－１９）。これは、キリスト教信仰で「悔い改め」と呼ぶ大切な転機であります。聖書で「悔い改める」という言葉は、もともとは「向きを変える」という意味の言葉です。父なる神に背を向けて生きていた、神を無視して、いらないと生きてきたそれまでの生き方の向きを変えて、神のもとへ帰る。この弟息子はこのときまさに、向きを変えて、父の家へと帰ろうとしています。

ただ、彼が父の家に帰ろうと決意したその動機というものはどういうものだったでしょうか？　「ああ、自分は間違っていた。あの優しい父を深く悲しませてきた」と悔いて、やっぱり父のもとへ帰ろうと決意した、というのではどうもない。今ここでは、自分は食べることができなくて飢え死にしそうになっている。けれども父の家では食べ物が余っていて、雇い人でさえ十分に食べることができている。生き延びるために、父の家に行って頭を下げよう、と考えた。あの父のことを思って、父を悲しませたことを悔いて帰ろうというよりも、自分が食べていくため、生き延びるために、これしかないと思った。言ってみれば、実に身勝手な論理であり、この息子は自分のことしか考えてない、とも言える。この物語の後半で、彼の兄が「そんなのおかしい、自分勝手だ」と激しく怒っている。けれども、むしろそれは当然の反応ではないでしょうか。

ただ、自分勝手な彼も、さすがに「息子なのだから、迎え入れてもらって当たり前だ」などとは思っていない－そんなのさすがに都合が良すぎる、虫が良すぎることは分かっている。それが、「**もう、あなたの息子と呼ばれる資格はありません**」という言葉に表されています。父を捨てて、財産だけもらって家を飛び出したのだから、もはや子どもには戻れない。

そのため、今さら家に帰って行くなんて虫が良すぎることは自分でも十分分かっている。家に帰ろうとしているものの、そのような資格などない、帰るに帰れない思いを彼は抱えていました。しかし、家に帰る以外に生きていく道がないために、父親をはじめ、周りの人々の反感や怒りを覚悟し想像しながらも、家に帰って行こうとしました。

そこで、そのような自分の思いを表明するためにも、子どもとしてではなく、雇い人の一人として、家に置いてもらおうと考えた。あの家に置いてくれるだけでいい、食べさせてもらうだけでいい. そのように父にお願いしようと決心して旅立つ。恐らく、１

８節から１９節にかけての言葉を何度も練習しながら歩いていたのではないでしょうか。「**父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください**」。

彼が自分の家に近づいたとき、父親が真っ先に息子の姿を見つけました。息子が家を飛び出していった日以来、父は息子のことを忘れることはありませんでした。毎日のように、家の前に立って、息子の帰りを待ち続けていたのでしょう。もしかしたら、「あんな親不孝の息子のことなど早く忘れた方がいい」と周りの人がいったかもしれない。しかし父親にとり、どんなになっても愛する息子であることに変わりはなかった。

この親子の再会の場面を、主イエスはこう語っておられます。２０節「**まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した**」。息子を見つけて、「ああ、ついに帰ってきた！」と思った瞬間、待ちきれなくて走り出した、という。帰って来た息子の姿を見たとき、憐れみの思いがあふれ出て、我慢できずに走り出した。大の大人が走るなんて、普通ではないようなことであります。しかし父は、息子のもとへ走りより、「良く帰ってきたな」と抱きしめた。

この息子は、急いで練習していた言葉を言って謝ろうとしました。２１節に「**父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません**」。続いて、「**どうぞ、雇い人のひとり同様に**」と言おうとしたのに、父親がそれを遮った。

２２節、「**しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから**」（２２－２４）。ここで父親は、私たちには考えられないようなことを言っています。自分勝手に家を飛び出して、父親の財産を全て使い果たしてしまった息子に対して、召使いとして雇うのではなく、息子として喜んで迎え入れ、しかも歓迎の晩餐会を開こうとしている。

このとき、父親は息子に対して非難するような言葉は一言も言っていません。財産を全部無くして帰って来たのだから、普通は「何だ今さら帰って来て。どういうつもりだ」と言うのではないでしょうか。もしこれが私たちだったら、迎え入れる前に、まず息子の悔い改めの本気度を問うのではないでしょうか？　本当に悪いと思っているのか、どこが悪いと思っているのか、そして、心を入れ替えて、これからどうしようと思っているのか、そのことをまず確認するのではないでしょうか。すなわち、息子の謝罪を受け入れるかどうかは、幾つかの基準、条件があって、その条件を満たして初めて、「今回だけは赦してやろう」と、渋々受け入れるものであります。ところがこの父親は、息子がどのような思いで帰って来たのか、その反省具合や覚悟などを確認せずに、自分のほうから駆け寄って、息子をそのままで迎え入れた。この父親は、何の条件も付けずに、息子をそのままで完全に赦しています。主イエスは、これがあなたがたの父なる神だ、と紹介しておられる。ここには、私たちの知らない神の姿が描かれています。こんな神を私たちは知らない。

皆さん、これは驚きではないでしょうか、世間でこのような親がどこにいるでしょう

か。これがもし私たちの家庭だったらどうでしょうか。赦してあげないわけではないものの、それには条件がある、と言う。相手がこちらが思っているような反省をしているか、悔い改めをしているかが鍵となります。私たち人間の世界では、赦しというものは無条件で恵みとして与えられるものではありません。こちらの悔い改めの本気度や誠実さを一生懸命アピールして、獲得しなければならないものでありましょう。赦してもらうなどということは、そんな簡単なことではありません。悔い改めの深さ、その内容によって、条件を満たしたときに初めて赦しが与えられる。しかし、神の赦しは私たち人間の世界のそれとは違って、神の赦しが先に立ちます。人が悔い改める前に、神は私たち罪人を赦しておられる、と主イエスは語られる。私たちは、そんなのは甘えの世界であり、そんなことをしたら、反省するどころか、いよいよ付け上がるのではないか、と思うでありましょう。しかし、人は本当に赦されたと分かった時こそ、心の底から悔い改めるものであります。

私がいろんなところで紹介する本で『愛は裁かず』という本があります。これは一般の書店で売られている少し前の本です。これを書いたのは、名古屋家庭裁判所で調査官や調停員などをずっとされたクリスチャンの方です。その中に、一人の少年についての話がこのように書かれています。空巣という盗みをして家裁に送致された中学二年の少年に、家裁の調査官として面接することになった。本籍、住所、氏名、生年月日、非行事実などを確認したあと、「君はアルバイトの新聞配達をしているのですか」とたずねた。

「はい」と低い声で返事をした。

新聞配達のときに空巣をしたので、この問いは事件の核心に触れるものであった。

「いつごろから、始めたのですか。」

「小学校五年の春から。」

「朝刊ですか、夕刊ですか。」

「朝刊も夕刊も」と答えてから、

「朝刊を配ってから学校へ行き、下校してから夕刊を配る」と説明した。

「もらったお金はどうするの。」

「お母さんが、『お前に持たせておくと使うからお母さんが預かっておく』といって皆貯金してしまうから、どうなっているかわかりません。」

「それでは、お小遣いはどうなっているのですか。」

「お小遣いはもらいません。だから新聞配達の友だちが、暑い日にアイスキャンデーを買ってくれても、僕はお返しができませんでした。友だちのお母さんは、『新聞配達でもうけたお金はあなたのものだから、自分の自由にしなさい』というので友だちは自分で貯金したり、小遣いにしたりしているのです。そういう話を聞くと、友だちのお母さんのようだとよいがなあ、と思うことがあります」と遠慮がちにいった。母親は傍らで、それを黙って聞いていた。母親は、子どもがどのようにしてほしいのかということを考えたこともなく、中学二年にもなるのに子どもの自主性を尊重せずに来ていることがわかる。また、子どもの小遣い銭の欲しいことも分からないであろうか。それとも分かってはいるが、節約の習慣をつけようとしているのであろうか。母親の先ほど言った「お前に持たせておくと使うから、お母さんが預かっておく」という言葉は子どもに対する不信で、子

どもを愛する人の使う言葉ではない。子どもは、友人のいるよその家庭と比較して自分の母親像を浮き彫りにしていることが分かる。これを愛情に欠ける親という。

このような状況の中にあるこの子が盗みをしたのである。

「朝刊は朝何時に起きて配るのですか。」

「五時に起きて準備をする。」

「冬は。」

「冬でも五時に起きる。」

「雨や嵐の日は。」

分かっているが、傍らの母親に聞いてもらうために念押しをした。

「雨や嵐のときでも休んだことはない」と当然のことのようにはっきり答えた。

何という責任感の強い子であろうか。そのとき、

「えらい子だね」と思わずことばが出た。

「一日や二日でなくて、四年近くも、冬の寒い日にも、そのような時間に起きて配達するなんて、この先生にもできない。本当にえらい子だねぇ」と少年の顔をじっと見つめながら言った。

すると、少年の両眼から大粒の涙がこぼれて、静かに頬を伝わりはじめた。まことに迫力のある光景である。しばらくして、少年は口を切った。

「泥棒をするようじゃ、ちっとも偉くありません」とゆっくり力をこめて言って、涙を初めて手で拭った。少年が自己洞察ともいわれる反省をしている瞬間である。深い反省の涙が、少年の傷ついた心を洗っているようであった。

それにしても、このような反省がいかにして生じたのであろうか。それは少年の罪を責めている点が微塵もないからである。少年の盗みの原因を思いやりの少ない家庭環境にありと考え、ひとことも少年の責任を追及せずに赦していることが、少年を誉めた言葉の中に含まれている。言葉で「赦した」と言わなくても、少年にはそれが分かったからである。誉めたことは、すなわち赦すことを意味していたのである。

裁かれ責められるのが当然と予想していたのに、それには触れずに誉められたことが、深い衝撃となって愛を体験したことになる。人は赦されているときに、自己防衛がなくなって、安らぎの中に身をおきながら、自己の過ちを正視することができる。そこに反省と再出発の決断が生まれる。

子育てにおいて、親は子どもの過ちを責めて、罵倒したり、「ひとこと『ごめん』と、謝れ」と言ったり、「謝れば赦してやる」と付け加える。このように子どもを責めて謝らせることは、劣等感を深めることと、謝ることが上手になるだけである。人はしばしば、反省したら赦す、というが、人は赦すと反省をするのである。

これは一般の書物ですから、この方は信仰の話は持ち出していませんが、この放蕩息子のたとえに表されている神の姿、神の赦しはまさにここに書かれているとおりであります。聖書の神は、私たち罪人が悔い改める前に、私たちをすでに赦しておられる。「**哀れに思って走り寄り**」というこの父親の姿は、私たちが悔い改める前に、私たちを赦し、私たちを無条件で受け入れてくださる神の姿を描いています。私たち罪

人の側には、「こんな私では、神の子と呼ばれる資格などない」という拘りがあります。この息子は父の家に帰って行きながらも、家にたどり着くまでの最後の数メートル、数十メートルの距離がとてつもなく遠く感じるーそれほど父と子の間には、大きな隔たりがあります。断絶がある。しかし、その大きな隔たりを乗り越えさせたものが、この父の憐れみによる駆け寄りであります。私たちが悔い改めると言っても、もし、神さまから「自分の力でここまで来なさい」と求められたら、「自分はダメだ」「赦してもらう資格などない」と諦めてしまう。その人間の側の拘りを乗り越えさせるもの、それが神の憐れみによる走り寄りであります。こちら側、人間から神のもとに行かなくても、神の方から人間の側に走り寄ってくださる。

そして、父なる神さまは、自分の力で神のもとにたどり着くことのできない私たち罪人のために、御子キリストをこの世に遣わしてくださり、神のほうが私たちに近づいて来てくださいました。神の御子が人間となってこの世に降られたということは、この父の憐れみの駆け寄りを表しています。この譬えを語りながら、主イエスは、父なる神はあなたがたを赦してくださる憐れみ深いお方である、と告げる。その父なる神の憐れみを届けようとして、あなたがたを赦そうとして、私がここまで来ているではないかと主は言われます。

この福音書を記したルカは、この後、父なる神から離れた人々を救うために、命を捨てられたキリストの十字架を書き記します。無条件の赦しと言っても、神の側は何もしなかったわけではありません。私たち罪人を無条件で赦すために、御子キリストが十字架にかかってくださいました。十字架にかけられながら、「**父よ、彼らをおゆるし下さい**」と祈ってくださった。聖書は、天の父なる神は、キリストのゆえに、あなたがたを赦してくださるお方である、と私たちに告げます。

１００匹の羊のうちの失われた１匹、１０枚の銀貨のうちの失われた１枚、そして二人の息子のうちの失われた一人、その一人の失われた人を主イエスは探し求めておられる。その失われた一人のためにも、主イエスが十字架にかかってくださいました。その迎え入れるのを大喜びしてくださる神がここにおられる。この神の深い憐れみが分かるとき、人はそのとき本当の意味で悔い改めることができる。神に赦していただくために悔い改めるのではありません。すでに赦されていることが分かったからこそ、キリストの十字架によって罪が赦されていることを知ったからこそ、向きを変えて、この父なる神のもとへ帰ってくることができる。帰るというのは、赦しを受け取るということです。「ありがとうございます。あなたが赦してくださったことを信じます」、それが悔い改めるということですね。

命をかけた神の赦しの恵みに応答して、私たちは神を心から「**父よ**」と呼びます。本来、「**父よ**」とは呼ぶ資格などない者たちを、神は御子キリストの十字架のゆえに、その深い憐れみのゆえに、子として迎え入れてくださいました。「**天にまします我らの父よ**」とは、この神の憐れみを受けた者たちの感謝の応答であります。主イエスは今朝も、「さあ、あなたがたも、神に向かって『父よ』と呼びなさい」と、私たち一人ひとりを招いていておられます。その主イエスの愛の招きに答えて、喜びと感謝をもって、「**アバ父よ**」と呼ぼうではありませんか。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、今朝もあなたに赦されて、神を「父よ」と呼ぶ恵みの中に置いていてくださることをありがとうございます。私たちも資格のない者たちです。何の功しもない者たちが御子キリストのゆえに、十字架のゆえに赦しを受けて、神のもとへ繰り返し戻って行く、その歩みを続けられていることを感謝いたします。教会に連なるお一人おひとりの上に、あるいはまだ神を呼んだことがない方もおられることでありましょう。どうぞ、そのお一人おひとりの中に「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊をお与えくださいますことをお願いいたします。

私たちの歩みを顧みてくださって、赦しを受けた者として周りを赦していく、どうぞその歩みへとこの週も送り出してくださいますことをお願いいたします。

病気や弱さを覚えておられる方々、病に伏している方々、どうぞあなたの癒しをお与えくださいますことをお願いいたします。

新会堂の工事が最後の大詰めを迎えています。あと一ヶ月ほどで完成ですが、事故、トラブルから守ってくださって完成へといたらせてくださることをお願いいたします。

東北教区の五つの教会、弘前、三沢、築館、仙台、福島、派遣の宮古、それぞれの教会をあなたが祝福してください。

新型コロナウイルスのために懸命に働いておられている方々の働きを支えてください。治療薬やワクチンの開発の上に神の憐れみが与えられますようにお願いいたします。

このときを感謝し、主イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会　佐藤信人牧師）